

シャーンティデーヴァにおける利他行

——同師の著作にみられる布施と廻向、および菩提心の関係について——

佐々木 一 憲

シャーンティデーヴァの著作 *Śikṣāsamuccaya* (: SS) は、種々の先行研究が明らかにしてきたように¹⁾、論主が提示する特徴的な〈菩薩行の学処体系〉に沿う形で集められた引用文によって構成される、大乘經典の經典引用文集の体裁をとる論書である。

シャーンティデーヴァは本書で、〈要処〉(marmasthāna) と呼ばれる七つの項目を用いながら菩薩行の〈学処〉を整理する。論主はまず、【身体】、【享受(物)】、【善性】という三つの事物と、それらを媒介に実践される【捨施】、【守護】、【浄化】、【増大】という四つの実践行為からなる二組・七項目を挙げて〈要処〉とし、次にこの七つの〈要処〉から、前半の三つと後半の四つをそれぞれ掛け合せて 12 項目の菩薩の〈学処〉というものを作る。SS は、その 12 の〈学処〉が織り込まれた 27 偈の〈根本頌〉(kārikā) を骨格とし、そこに教証となる經文を挙げて肉付けしていくという形で編まれている。

ところでその〈根本頌〉27 偈は論題の違いによって大きく二つのグループに分けることができる。すなわち、「自他平等観」、「菩提心」を説き、菩薩行の基調精神を提示する第 1, 2 偈と、その菩提心に基づく「行」を説くところの第 3, 4 偈以降の偈群である。

上に述べた本書の枢要である七つの〈要処〉は、後者の「行」を説く偈群の冒頭に位置する〈根本偈〉の第 4 偈において一括して提示される。つまり、SS の学処体系は、具体的にはこの「行」を説く偈群において展開しているとみることができる。このような構成を持つことから SS は、菩提心を全体のテーマとし、その菩提心に基づく具体的な行のあり方を〈学処〉という形で提示する論書である、ということができる。

さて、その第 4 偈に提示された七〈要処〉のうち、具体的な実践行為として取り上げられた後半の四つの要処の間には、【捨施】を上位におく階層がつくられ

ているとみることができる。

SS の構成を見ると、【捨施】を除く残りの三つの要処——【守護】、【浄化】、【増大】——の解説部分は、それぞれ〈根本頌〉の第 5 偈、第 17 偈、第 22 偈の各偈の提示から始まっている。その三つの偈は以下のようなものである。

（第 5 偈）衆生の享受のために、身体などが差し出される。

守護しない場合には、どこから享受があらうか？

享受されないものがどうして施物であらうか？

（第 17 偈）清められた身体を享受することは、人々にとってふさわしいものとなるう。

あたかも適切に炊かれた、糠のない米飯のように。

（第 22 偈）受け取る者達は非常に多く、これは少ない。これが何になるうか？

（これは）満足を生むものではない。それ故、増大されるべきである。

ここにあげた三つの偈は、下線を引いた部分の表現に見られるように、いずれも衆生に享受されることを前提とする視点から語られていることが分かる。つまり、【守護】、【浄化】、【増大】の三要処は、衆生に各種対象物を享受させる【捨施】という行為に主眼をおき、その適切な遂行に寄与するための準備的な実践行として、【捨施】よりも一段低いレベルで説かれているとみることができるのである²⁾。

さて、シャーンティデーヴァの主著『入菩提行論』（BCA）の原型となる典籍として、かねてから敦煌出土のアクシャヤマティ作『入菩薩行論』（BsCA）という典籍を紹介していた斎藤明博士は、近年さらに、その BsCA が、BCA のみならず SS にも先行して成立し、かつ SS の成立それ自体に直接の影響を与えた論書であることを指摘している（斎藤 [2001]）³⁾。

斎藤 [2001] はその根拠の一つとして、先述の〈要処〉を提示する SS の〈根本頌〉第 4 偈が、以下の BsCA 第二章 75 偈（BCA 第三章 10 偈に相当）をもとに作られたものだと考えられることを挙げている。

【身体】と、同様に【享受】と、三世の【善性】とのすべてを、

一切衆生の利益を成就するために、惜しむことなく私は「放棄」しよう。

この偈頌の前半部には、SS の〈根本頌〉第 4 偈と同様、【身体】、【享受】、【善性】という三つの対象物が提示されており、このことから確かに SS は BsCA の偈頌を参考にしているといつてよさそうである。一方、偈頌後半について見ると、SS 〈根本偈〉中の語【捨施】（utsarga）に相当するとみられる「放棄」（tyajāmi）という語こそ確認されるものの、SS の偈の対応箇所には列挙されていた他の三つの〈要処〉についての言及はみられない。

ここで、斎藤博士の指摘のとおり、SSの第4偈がこのBsCAの偈を下敷きに増広されて出来たものだとするならば、〈要処〉のうち、BsCAの偈には存在せず、SSの〈根本頌〉には存在している、【守護】以下の増加した三つの〈要処〉は、SS成立の時点で論主によりSSに新たに付加された要素であると考えられることになる。

筆者は以前、この【守護】以下の三つの要処が〈四正勤〉から一体的に作られたものであることを報告したが⁴⁾、SS独自の造論の目的がその同書における増加分の方により強く反映していると考えた場合、この典籍は、BsCAに掲げられた放棄／捨施という基本精神を基調としながら、その精神に沿った具体的な実践のあり方を〈四正勤〉に絡めて示すことを目的として編まれたものだったとみることができることになるだろう。

先に見た、四要処の間にみられる【捨施】を上位とする階層は、このSS造論の趣旨と経緯を反映したものと考えられる。すなわち、シャーンティデーヴァの著作に説かれる菩薩行の要点は《衆生に対して自己と自己にまつわるすべてを放擲する》という意味での利他行に集約されているのである。

さて、ではその【捨施】はどのような背景の上に説かれているだろうか。SSにおいて【捨施】(utsarga)は、第一章に集中的に説かれている。第一章には、前半において「菩提心」が説かれ、後半において【捨施】の学処が説かれているが、この章に「布施波羅蜜」という章題が与えられていることからすれば、シャーンティデーヴァは、同章後半に説かれるような【身体】、【享受(物)】および【善性】の【捨施】、ということを指して〈布施波羅蜜〉と称している、ということになるだろう。

この〈布施波羅蜜〉としての【捨施】に関して論主は、その主要部分の説明の大半を、『金剛幢經』(*Vajradhvaja-sūtra*; 『華嚴經・金剛幢菩薩廻向品』)の第一廻向と第六廻向からの一連の引用によってまかなっている。

同經の引用部分には、乞求者に対して、彼らの幸福や菩提のために、菩薩が自分にまつわるもの全てを軒並み差し出し、供与すると語る定型的な文が繰り返し語られている。つまり同經の題名となっている〈廻向〉は、衆生への〈布施〉ということ直接的な内容とするものであることがわかる。【捨施】(utsarga)という語もまた、そうした文脈の中で、〈布施〉(*dāna*)や〈棄捨〉(*tyāga*)といった類義語とともに、衆生への利他行を表す語として用いられている。

すなわち、SS には【捨施】を説く第一章に〈布施波羅蜜〉という章題が与えられ、その【捨施】を裏付ける教証として〈廻向〉を説く経典（『金剛幢菩薩廻向品』）が引かれ、その中でさらに、〈棄捨〉や〈廻向〉の言い換え表現として、【捨施】という語が再度用いられる、という関係が存在していることがわかる。以上から、ここに登場する【捨施】、〈棄捨〉、〈布施〉、〈廻向〉という言葉は、SS においてはすべて先述したような意味での利他行を意味し、また相互に入れ替え可能な語として使われている、とみることができる。

【捨施】という言葉が、〈布施〉のみならず〈廻向〉という言葉の言い換え表現としても用いられるという例は、本書の『金剛幢菩薩廻向品』の引用箇所だけに見られるものではなく、シャーンティデーヴァのもう一方の著作である BCA においても看取される。

その最も顕著な例は、前に既に触れた BsCA 第二章 75 偈の、現行本 BCA における相当偈である第三章 10 偈、および同偈に対するプラジュニャーカラマティの『入菩提行論細疏』（：BCAP）の注釈部分にある以下のものだろう。

先ほど紹介したように、この偈は SS の第 4 偈後半に提示される四つの学処（【捨施】、【守護】、【浄化】、【増大】）のうち、【捨施】⁵⁾ にあたる内容のみを抽出して説くものであったが、同偈は本来、BCA 中で発菩提心の前行として説かれる anuttarapūjā（「七浄行」）⁶⁾ の最後の一肢である〈廻向〉の説明として説かれているものである。つまり、SS に見られた、【捨施】、〈棄捨〉、〈廻向〉という三語がそれぞれ相互に他の語を説明しあうという関係は、BCA にも共通して存在していることがわかる。

さて、上述の偈が含まれる BCA の第三章には「菩提心の摂受」という章題が与えられている。また、本稿のはじめにも触れたように、SS は〈布施波羅蜜〉と題される第一章の中でその冒頭に菩提心を説くという形をとっている。包含関係はちょうど逆になるが、この二例はいずれも、シャーンティデーヴァが、菩提心と、捨施・布施＝廻向と表現される利他行とを、目的と手段になぞらえられる関係で見えていたことを示唆している。

BCA の注釈者プラジュニャーカラマティは、BCA 第三章の、〈廻向〉（第 10 ～ 21 偈）から〈発心〉（22, 23 偈）へと話題を移すつなぎの部分に、「それゆえ、菩提を求める者達は、これら自己などの【捨施】をなすべきである。この布施は

(156)

シャーンティデーヴァにおける利他行（佐々木）

SS に詳細に示されている」という言葉をおいて、この〈廻向〉と〈菩提心〉という二つの概念を結びつけている。

この一文においてプラジュニャーカラマティは、直前まで〈廻向〉として語られてきた内容を「これら」と受けて、自己などの【捨施】という言葉に置き換え、それをさらに「布施」と言い換えたいうで、その詳細は SS に説かれているとして、直後に SS の第一章における【捨施】の説明箇所の経文群を引用するのである。

また、その【捨施】は、発心を説く偈の直前に、まさに「菩提を求める者達」に対して、ということに勧められている点に注意される。すなわち、シャーンティデーヴァの説く修道体系において廻向＝捨施は、菩提を得るための主たる行として説かれている⁷⁾とみることができるのである。

以上から、シャーンティデーヴァ自身、および彼の後継者達の間では、この廻向＝捨施と表現される利他行が、菩提の獲得に直結するような、直接的な菩提行として認識されていたと認めることができるだろう。

以上から、シャーンティデーヴァの典籍においては、〈布施〉の一環としての、衆生に対する直接的な利他行を意味する【捨施】という実践が、〈廻向〉という概念を介して、そのまま自らの菩提を志向する行としての〈菩薩行〉ともなる、という理解がなされていたと考えられる。

本稿はその特質を、【捨施】を軸に菩薩の学処体系を組織する SS の構成、および同師の著作に共通して見られる用語法の特徴から明らかにしたが、同師の説く菩薩行の特徴をより精密に理解するためには、〈般若波羅蜜〉や〈空〉、また〈菩薩の階位〉といった関連する諸概念について、同師のとらえ方をさらに詳しく考察する必要があるだろう。それらの点については稿を改めたい。

(※紙幅の都合により注記および参考文献表は割愛させていただきます。)

〈キーワード〉 シャーンティデーヴァ, *Śikṣāsamuccaya*, *Bodhicaryāvatāra*, 中観, 華嚴経, 修道論, 廻向, 菩提心

((財) 東方研究会研究員)